

三重大学に全国の環境法学者が結集。環境法政策学会第20回学術大会を開催

人文学部 | 前田 定孝(准教授)

「文系学部だって環境研究をやっているんだ!」。昨年6月17日、環境法政策学会第20回学術大会を三重大学人文学部を中心に開催し、全国から約150名の研究者が集まりました。

本学会は、「生物多様性と持続可能性」をテーマに、開催されました。生物多様性がテーマとなるのは、8年前の第13回学術大会以来のことです。とりわけ今回は、名古屋で開催された生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)の後に展開した法制度の進展状況や問題点等が検討されました。

全体シンポジウムでは、日本における生物多様性と自然保護法制についての総括的な検討(磯崎博司:上智大学)、自然保護区の保全と管理のあり方(吉田正人:筑波大学)やABS国内措置(北村喜宣:上智大学)、海洋における生物多様性の保全(河野真理子:早稲田大学)、生物多様性や自然保護に関する訴訟等(及川敬貴:横浜国立大学)について、総括的な報告・検討がなされました。

また、分科会では、①気候変動への対策等も含む地球温暖化・エネルギー(司会・石野耕也:中央大学)、②化学物質に関する外国の法制度の検討を含む国際法・外国法(司会・西井正弘:大阪女学院大学)、③外来生物管理の問題を含む生物多様性の問題(司会・岩間徹:西南学院大学)、④廃棄物行政を含む環境訴訟およびその他環境法の問題(司会・紙野健二:名古屋大学)などについての分科会がもたれました。今学術大会では、さらに企画セッションとして、「石炭火力発電所の新增設問題」(司会・高村ゆかり:名古屋大学)も設置されました。

本学を本学会の開催校とすることについて打診があったのは、時あたかも、文部科学省が、国立大学の人文系学部の縮少・統廃合を求める施策を打ち出す直前の、2年前の3月末のことでした。われわれは、当時の後藤基・人文学部長とも相談したうえで、今後の三重大学人文学部の存在感を全国に示すために、本学会の開催校を引き受けることとしました。

開催する以上は、全国から来ていただいた先生方に満足して帰っていただくこと、岩崎恭彦、石塚哲朗の両人文学部准教授と、会場の準備から懇親会の段取りにいたるまで、学内のさまざまなところに協力を呼びかけて準備しました。とりわけ懇親会については「御食(みけつ)国」三重に全国から名のある先生方が集まるということで、ぜひ三重の豊かな生物多様性あふれる食べ物を堪能していただくこと、相当綿密に打ち合わせをし、同時にかなりの無理をお願いしました。「おいしい食べ物を食べにきてください」との前宣伝も効を奏して、懇親会は大盛況でした。

国立大学といえば、とかく理工系が中心と考えられがちです。環境報告書等で紹介される研究成果についても、農学系や工学系をはじめとする自然科学系が目立っていました。このようななかで、本学会の開催は、「三重大学の環境研究においても人文・社会科学系が全国的に重要な位置を占めている」との認識を学内構成員一同にももっていただく契機となったと考えています。「有効な手段の一つとしての法律の観点から環境政策を議論する場」(加納理事)としての環境法政策学会学術大会が本学で開催できたことは、たいへんな誇りであり、大きな成果です。



加納 哲理事挨拶